

◇第6回年次大会開催のお知らせ

平成26年9月7日(日) 13:20~17:50 於日本大学芸術学部江古田校舎 西棟 W-303 教室
西武池袋線 江古田駅北口下車2分。池袋方面に向かって直ぐです。校舎案内につきましては <http://www.art.nihon-u.ac.jp/about/showcase.html> をご参照下さい。

今回は文学の面白さと本質に迫る非常に興味深い研究発表と「学問的知見を英語教育に活かす」連続シンポジウムを企画致しました。後者は文字通り英語学・英語教育学・英文学の成果を教室で生かす試みで、専攻分野を問わず、英語を教えておられる先生方にとって、直ぐに役立つメソッド(使える教授法)なども紹介する予定です。発表内容につきましては各領域の専門的知識があることを特に前提としておりません。多数のご来場を心よりお待ちしております。

<プログラム>

- 開会の辞(13:20) 欧米言語文化学会会長 植月 恵一郎
- 研究発表(13:30-14:30) 司会 早稲田大学非常勤講師 田村 裕二
ジョナサン・スウィフトの「桶物語」——その風刺の手法
青山学院大学非常勤講師 妹尾新太郎

○連続シンポジウム「学問的知見を英語教育に活かす」(14:40-17:00)

- [司会・コーディネーター] 和光大学非常勤講師 奥井 裕
- 「英語の指示表現の機能」 [発題者] 日本女子体育大学助教 山田 七恵
- 「English as a Lingua Franca (ELF) に基づいた英語教育」
[発題者] 明星大学助教 藤原 愛
- 「英語史の知見を英語教育に活かす～習熟度の別を問わない効果的な発問を探る～」
[発題者] 日本獣医生命科学大学専任講師 鵜崎 敏彦

○総会(第28回通常総会:17:30-17:50)

- 司会 欧米言語文化学会幹事長 水野 隆之
- ・本部活動報告 欧米言語文化学会幹事長 水野 隆之
- ・関西支部活動報告 欧米言語文化学会幹事・関西支部幹事補佐 吉田 一穂
- ・会計報告 欧米言語文化学会会計局長 近藤 直樹

- 閉会の辞(17:50) 欧米言語文化学会編集代表 加賀 岳彦

○懇親会(18:30-20:30)

- 司会 欧米言語文化学会事務局長 奥井 裕
- 於池袋東武百貨店本館15階 湖南料理「華湘」TEL 03-5951-0301 会費 6,500円

研究発表要旨

ジョナサン・スウィフトの『桶物語』——その風刺の手法

妹尾新太郎

今回のお話では、ジョナサン・スウィフトの『桶物語』を取り上げてみたいと思います。これは、架空の作者「三文文士」が書いた作品という設定のもとに、スウィフトがその

「三文文士」の様々な言説を通して、当時の学者や文人たちの思潮やら、悪癖やら、無能振りやらを痛烈に風刺した傑作です。この空想上の作者「三文文士」にスウィフトは、どのような物の言い方をさせ、どのような形で当代の学識者を風刺し、揶揄しているのか、その手法を検証してみようというのが今般の私の話の主眼です。

バフチンは、「パロディー」を定義して、「物の像をあちこち伸ばしたり縮めたり捻ったりする歪んだ鏡」と呼びましたが、一言でいえば、「三文文士」というスウィフトが造形した架空の作者が果たしているのは、正にこの「歪んだ鏡」の機能であります。つまり、対象を想いのままに歪めて映し出すことによって、その対象を揶揄し、笑い物にするという仕組みです。そして、この歪曲の機能を生み出す根本原理として用いられているのが、古代ローマの原子論哲学者ルクレティウスの「表層の哲学」ないし「逆様の言説」なのですが、その辺のところ今少し詳しくお話しさせて頂きたいと思えます。

連続シンポジウム「学問的知見を英語教育に活かす」

本シンポジウムの趣旨

鴫崎 敏彦

学会の存在意義の1つに社会貢献があることは論を待たない。そして、当学会が守備範囲としている諸分野の研究活動を社会に還元する有効な手段の1つに、その研究成果の英語教育への応用が挙げられることも、多くが認めるところだろう。そこで、最近の英語教育の動向に目を向けてみると、コミュニケーション能力が重要視されており、とにかく「慣れる」ことで英語力を育成しようとする傾向にあるように感じられる。もちろん、「慣れる」ことは大切であるし、英語をツールとして使えるようにならなければ、学習する意味がないのも当然である。しかし、限られた時間の中で効率よく英語力を身に付けるためには、「慣れる」だけではなく、きちんと「理解」することも重要であることは間違いない。その「理解」を促す過程で、最新の研究成果はもちろんのこと、概論レベルの知識であっても、授業者の工夫次第で、学問的知見を活かすことは十分に可能であると考えている。本シンポジウムでは、「学問的知見を英語教育に活かす」というテーマのもと、各発表者が、各々の専門分野における英語教育を活かすことのできる学問的知見や、その知見を活かした教授法について取り上げる。

発題者1

英語の指示表現の機能

山田 七恵

中学校および高等学校で文法事項を教授する際に使用される例文は、文法事項の習得に重きが置かれているため、当然ながらそれがどのような状況で使われているのか、前後関係や談話者の知識にまで注意が払われることは殆どない。しかし、**There is a pen on the desk. The girl standing at the door is my sister. I met a boy whose father is a famous writer.** など、定／不定冠詞をはじめ指示形容詞・代名詞を含む指示表現の用法を正しく学ぶ（教える）ためには、談話内で話し手と聞き手がどのようにその対象を認知しているのか、語用論的な要因を考えることが不可欠である。本発表では、英語指示表現の用法を再確認するとともに、それが談話内でどのように認知され、どのような前提のもとで使用可能なのかに着目し、例文を検討していく。談話者が指示表現をどのような直感で使用しているのか光を当てること、英語の指示表現の機能を再考したい。

発題者2

English as a Lingua Franca (ELF) に基づいた英語教育

藤原 愛

国際理解や異文化理解が叫ばれる今日、コミュニケーションを重視した日本の英語教育において、「発音」についても ELF の視点からのさらなる研究、またそれに基づいた指導法が求められている。いわゆる「ネイティブの発音」にとどまらず、英語の発音はどうなっているか、またどうあるべきかを学生とともに考える授業を行っている。世界に広がる英語話者の現状を理解することにより、新しい英語の形を学習者に提示することで、日本人がコンプレックスを抱きやすい「発音」を、もっと楽しんで学習して欲しいと願っている。また、日本語母語話者にとってなぜ英語を習得することが難しいのかを、日本語と英語、必要であればその他の言語の発音を比較し考えていくことにより、自らの母語についての理解も深められると考えている。今回の発表では、発音を **correct** (正しい) という考え方ではなく、**intelligible** (理解できる) という側面から捉え直し、今後の英語教育への示唆を与えていきたい。

発題者 3

英語史の知見を英語教育に活かす～習熟度の別を問わない効果的な発問を探る～

鴫崎 敏彦

これまで発表者は、中学校、高等学校、専門学校、大学と、様々な教育機関で英語の授業を担当してきたが、どの教育機関の授業においても、学生（生徒）の興味・関心を引いたり、より深く理解させたりする上で、英語史の知識は非常に有用であると感じてきた。もちろん、英語史の知見を授業者が説明の中で披露するだけでも、学生（生徒）の知的好奇心を喚起するという効果は生まれるだろう。しかし、それだけでは、学生（生徒）に自分の頭を使って「考える」ということをさせることができない。そこで、発表者は、「発問」を工夫することで、学生（生徒）に「考える」きっかけを与えることが重要であると考えている。本発表では、義務教育課程を修了している英語学習者を対象とし、彼らにこれまで考えたこともなかったようなことを考えさせ、本質的な理解へと導くために、英語史の知見を活かした「発問」が習熟度の別を問わず効果的であることを、実践報告の形で提示したい。